View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hosei University Repository

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

朝海浩一郎日記抄(1)

著者	朝海 和夫，河野 康子，村上 友章，井上 正也，白鳥 潤一郎
出版者	法学志林協会
雑誌名	法学志林
巻	112
号	1
ページ	99-119
発行年	2014-09-19
URL	http://hdl.handle.net/10114/11211

Hosei University Repository

資料

朝海浩一郎日記抄（一）

翻　刻　朝海　和夫（立命館大学）
翻刻協力「朝海浩一郎日記」研究会
河野　康子（法政大学）
村上　友章（立命館大学）
井上　正也（香川大学）
白鳥潤一郎（北海道大学）

解題：

ここに紹介する資料「朝海浩一郎日記抄」は、外交官・朝海浩一郎（一九〇六年―一九九五年）の日記（以下、朝海日記と略記）について一九二九年から一九五四年までの部分を抜粋し、その一部を翻刻したものである。朝海浩一郎は、一九二九年に東京商科大学（現・一橋大学）を卒業、外務省に入省した。在外研究員としてイギリス・エディンバラ大学に留学、その後、駐英大使館に勤務した。日記からは当時の日本外交が直面した苦悩が如実に伝わってくる。満州事変から上海事変にかけての日本外交に対するイギリスのメディアの反応、国際連盟の動き、国際連盟で演説した後の松岡洋右の印象などを朝海は日記に詳しく記録している。その後一九三三年、朝海は南京総領事館（中華民国）の領事館補となった。南京には一九三六年まで勤務する。日中戦争へ向う時期の南京では外交と軍事との緊張関係が厳しさを増していた。朝海は外交二元化への過程を身を以て経験したのである。帰国後は本省の東亜局、情報局などを歴任し敗戦を迎えた。

戦後の朝海は、一九四六年三月終戦連絡中央事務局総務部総務課長を経て一九四八年には連絡調整中央事務局長官に就任した。幣原内閣末期から第二次吉田内閣期まで、占領軍総司令部と日本政府との連絡調整に当たったのである。占領期の朝海については、既に著書『初期対日占領政策―朝海浩一郎報告書（上・下）』（一九七八年、毎日新聞社）が知られている。占領初期、ソ連を含む連合国がアメリカによる日本占領を監視する目的で対日理事会が東京・明治ビルに置かれていた。朝海は、一九四六年から一九四七年まで四五回にわたる対日理事会に参加して傍聴記録を作成した。『初期対日占領政策（上・下）』は、外務省が編纂した傍聴記録をまとめたものである。上巻には、朝海浩一郎の他、三沢潤生（埼玉大学教授）、渡邉昭夫（東京大学教授）、天川晃（横浜国立大学助教授）による報告書の背景に関する座談会記録が収められている。占領初期に既に対日理事会でアメリカ代表とソ連代表との激しい応酬があったことが観察されており、占領期の日本を理解する上で貴重な資料である。

Hosei University Repository

占領終結後の朝海は、一九五三年、在英大使館の公使として皇太子の訪英に随行した。皇太子は英国女王の戴冠式に参列する目的で訪英したのである。この時期には既に、サンフランシスコ平和条約によって日本が国際社会へ復帰していたのであるが、イギリスの日本に対する態度は極めて厳しいものがあった。日記からは、日本軍によって被った被害をイギリス人がどのように受け止めていたのか、戦後の日英関係構築がいかに困難であったか、ということが窺われる。

朝海日記が令息・朝海和夫元ＥＵ大使のもとに保管されていることは渡邉昭夫東京大学名誉教授から紹介された。その後、渡邉教授のご尽力によって「朝海浩一郎日記研究会」のメンバーが朝海日記の一部の閲覧を許されることになった。なお現在「朝海浩一郎日記研究会」は、朝海日記原本の翻刻・読み合わせ作業を開始している。加えて翻刻作業を終えた段階で朝海日記を公開・刊行する準備も進めており、刊行は既に具体化しつつある。ここに紹介する「朝海浩一郎日記抄」は朝海和夫元ＥＵ大使自ら朝海日記の抜粋、及び翻刻を担当された。この第一原稿をもとに「朝海浩一郎日記研究会」のメンバーが朝海日記原本との照合・確認・補足などを行った。朝海日記の本格的な活用と研究への貢献、その史料的価値についての議論は、いずれも今後のこととなろう。ここで紹介する「朝海浩一郎日記抄」がそうした今後の研究・議論へ向けた一つの手掛りとなれば幸いである。

凡　例：

・【　】翻刻者による補足、解説、注記、要約など。

・〇　判読不能

・（中略）文章の途中で省略箇所がある場合。但し前後の文章が省略されている場合、表記せず。

本　文：

【日記は一九二九年七月、外務省の研修生として英国に船で赴任するところから始まる】

【一九二九年七月一五日横浜発二二日上海着】

欧米式の大建物の間を半裸体で焦げ付くようなアスファルトの上を裸足で俥を引いて走る苦力の姿も上海に於いては不調和なものではないのかも知れぬ。街を歩いても悪臭にむせかへるやうな事があった。要するに欧米の町に支那人を住まはせたにすぎない。住む人までも欧米化しはしなかった。

【→香港、シンガポール、彼南（ペナン）、コロンボ、八月一六日アデン、二一日スエズ、二五日ナポリ、二七日マルセイユ、二八日パリ、三一日カレー経由三時過ぎにドーヴァー上陸、ロンドンへ（注、横浜を出てから一ヶ月半）】

一九二九年九月一四日

Hosei University Repository

【牛津（オックスフォード）大学の事務所を訪問】

東京帝国大学ではない、東京商科大学だ、と云ふと、それはいかん、と急に手を振ってリストにない、と云ふ。東京インペリアルとケーオーきりリストにはないと云ふ。懸命に商大の好い学校であることを述べ立てる（中略）兎に角余り要領は得なかった。お前の英語はモダレートで講義は判るまいと云ふようなことを遠回しに云ったのは一寸シャクにも障ったが情けなくもあった。

一九三〇年一月一〇日

【ロンドンで留学先手続き中のところ、ロンドン海軍軍縮会議の「全権委員付き」を命ぜられ大使館勤務（注、一九三〇年一月二一日～四月二二日、ロンドン海軍軍縮会議、若槻禮次郎元総理が首席全権）】

一九三〇年二月二一日

【牛津大学より来信、入学は不能となった。】少しく力を落とし日記も中断して了った。

一九三〇年三月二五日

倫敦海軍首席随員の電報に、英米日本の確固たる決心を見て狼狽の色あり云々の字句あれば若槻全権は該電文上部にこの観察には同意するを得ずと筆を入れたるあたり当方に於ける空気も窺われるが東京でも軍部と外務側の足並みは中々に一致せざるものの如く思はるる。

一九三〇年四月二日

軍部との意見相異は誠に止むを得ざる立場の相違であらうが、本会議決裂後の日本の位置を思はば此処で協定に達せんと努むるのが穏当ではあるまいか。

一九三〇年四月二二日

【軍縮協定調印】

一九三〇年五月二三日

【ケンブリッジ大学より、入学試験は免除するがカレッジに入学する必要ありとの返信、ところがカレッジと】交渉を始めたが結局空席なく手遅れにて終わる

【エディンバラ大学からは、国際法の学位は授与できないがnon-graduating studentとしては入学可能との返信。】

一九三〇年一〇月七日【エディンバラ着、一〇日大学に出頭、書類には「学位は取れないがその他のすべての点で正規学生と異ならざる待遇を受けうる」と記載】

一九三〇年一一月六日

Hosei University Repository

正式にポストグラデュート・コースをアプライする前に【担当教授に面会】オナーズを有して居るか又はそれに相当した学力を有して居る事が必要であるが君のは判然としない（中略）など、余り芳しからぬ形勢だった。【アプリケーションフォーム」を提出し、】兎も角静かに推移を見ていよう。

一九三〇年一一月一五日

【浜口総理が襲われたとの報道を見て】

一日も早く回復の程を祈る次第である。原総理凶刃に斃れ、田中首相も狙はれた事がある。今又浜口総理の変を聞く。日本の憲政の前途も民衆の政治的訓練が未だきため遼遠であると云はねばならぬ。恥ずかしい次第ではないか。常識の発達と政治家の真面目な態度とが英国憲政の今日を齎した点は学ぶべき所である。直接行動の眩〇、憲法の発達に及ぼす影響を思ふとき一部愚者の憂ふべき愛国心に寒心せざるを得ないのである。」

【注、一九三〇年一一月一四日、浜口総理は東京駅で愛国社社員に銃撃さる】

一九三〇年一一月二七日

【ポストグラデュエートの件の担当教授に面会】MAをオナーズでパスしておらずばならないが君の程度は提出されたevidenceでは如何とも判断を下し難い。三月までにintermediateとfinalのオナーズを経済学でとって貰ひたい【と言はれ】結局消極に判断しておいた。【デイグリーに】代えて実力涵養を怠らざるようつとめなければならない。それがexcuseになるようなことであれば男子の恥辱此の上ない。困難に面してこれを避けたりと云ふべし。

一九三一年三月一〇日

【国際公法の講義も本日を以て終了】日本で聞いた平時国際法の講義が余りに冗長に失し余りに現実の問題、殊に最近の国際問題に触れることが少なく定義を論じ抽象的の理論を尋ね、ほとんど国際連盟の関係などには触れなかったのに比すれば、講義は余りに簡にして〇〇、此処の講義の方が遥かに生きていると云へやうか。

【注、留学中ではあるが満州事変勃発とともに毎日のように同事変について記述。】

一九三一年九月二一日

九月一九日のタイムズに日支兵の満州に於ける衝突が極めて簡単に出て居たが二一日のタイムズには詳細にこれが報道された。タイムズはその社説で此の問題を取り扱かって居るが語調は大体日本に同情的である。中村大尉事件及び広くは満州に於ける権益を支那に確認させる為に日本は辛抱強く耐へて来たが支那はこれを聴かなかった。現下の民政党内閣は支那と事を構ふるを好むものではない。併し日本の態度をかく云へばとてエ

Hosei University Repository

クスキュースするものではない。

【注、六月二七日中村大尉事件、九月一八日柳条湖事件】

一九三一年九月三〇日

満州事件も聯盟にかつぎ出されたし香港には支那人の反日的暴動があるし段々重大化して行って憂慮される。聯盟が中立国人よりなる審査官を現地に派遣する案を樹てたりしたものだが勿論日本はこれを喜ぶ道理がない。聯盟では日本は支那との直接交渉による事件の解決を主張したらしい。

一九三一年一〇月一二日

久しく満州事件を論説欄で取り扱うことを避けて居たタイムズは本日 Geneva to the rescue なる題で本問題を取り扱ったが語調著しく支那に同情的で日本の態度を難じて居り、一等国の軍隊が政府の訓令を越へて行動を続けんとするものであるか、と皮肉り、日本の軍事行動はリーグの規約に反するのみならず不戦条約にもとるとし、更に連盟のプレステイージへの打撃を許す事は軍縮会議及び国際的の財政〇〇に対する大障害たるべしとして日本の連盟に対する態度を暗に攻撃した。

一九三一年一〇月一七日

日本の対支直接交渉に関する態度極めて強硬なのに手を焼いたらしいリーグは不戦条約を口実にしてアメリカをカウンシルのテーブルに引き入れ（中略）その日本に対する重みを付する事に成功した。リーグがアメリカを理事会の席上に入れると云ふ事はリーグの構成上何と理屈を付けても無理な話（中略）連盟加入国に非ざる国が理事会の一席を占めて満州問題の関する限り理事国同様の活動をしやうとする。リーグのアメリカ招請に関する議論は全然薄弱（中略）要するに極東に利害の薄い国、日本の勢力拡大を喜ばざる国（中略）と云った国の集合して居るリーグ（中略）日本の問題を第三者を介入せしめずに直接に解決せんとするのがどうして戦争の脅威を構成し、アメリカのステップインを許すことになるのか。リーグとアメリカの干渉を期待する限り支那は遂に日本と直接に満州問題を解決する誠意を示さないであらう。

一九三一年一一月一六日

連盟の目的は平和を維持し両者に対する fair deal を確保するにあるが fair deal は支那にとり末節で支那は連盟を道具としてより良きなにものかを得んとして居るのである。

一九三二年一月一五日【オックスフォード大学 Zimmern 教授の講演】

満州問題に於ける日本の態度を批評して曰く『日本は今回規約十條、不戦條約、九カ国條約をヴァイオレートした。日本の連盟に対する態度については欧米も責あり。巴里において人種

Hosei University Repository

平等案を採用して居たならば日本の対聯盟観も変わって居たであろう』云々とした。日本非ありと断じた大胆さには驚かせられた。畢竟それは学者の議論で実際と相離るものと云ふべく日支間に存する歴史なり特殊関係なりを度外視して完全主権国を空想し理論を推したるものと云はれても一言はあるまい。全面的に日本に非ありと云った理論をたてた事は余りに僭越ではあるまいか。日本の支那に対する立場なりグリーヴァンスなりについて如何の知識を有しているかが第一疑問となる。自分は質問の時間に起って『仮に日本がその数何千件に及ぶ対支グリーヴァンスをジュネーヴなりヘーグにかつぎ出したりとしても紛争審理中に起こる事あるべきunlawful elementsの日本権益侵害に対して如何の保護が与へられるべきか』と質した。同教授は（中略）明瞭にされなかったのは残念だった。

一九三二年一月三一日【注、一月二八日上海事変発生】

支那がその不法な排日排貨を続けんとして日本がその抗議の容れられざるため実力を行使したのが此事件である。支那がその不法行為に対して有効の救済保障を与へれば日本の軍事行動もその理由がなくなるわけで禍根は除かれやう。

一九三二年二月五日【大学学生有志の組織する討論会に参加して発言】

日支関係を歴史的に説明（中略）日清戦争、日英同盟、列強の利権漁り、日露戦争、関東州租借権の譲與、世界大戦（中略）次に起ったのはシナ人学生（中略）冒頭先ず『前弁士により支那が今迄如何に力のないばかりに列国に蚕食されたかお判りになったらう』とやって（中略）『日本はマイトを有しており支那はライトを有する。マイトかライトか何れを採るか諸君の判断にお任せする』などとやったあたりは誠に口先きの巧い支那人を代表して余りあった。満場何れも感心顔（中略）センテイメントに訴えかなりアピールしたらしい

【注、「私は、これはもう少し言葉や表現の方法を勉強しなければいけないと反省した」～自伝「花みずきの庭にて」～p57)】

支那を完全主権国なりと考へて居る連中を感心せしめるに足る。自分は立って一々この論に反駁を加へた。曰く二十一ヶ條條約は合法的な条約である（中略）鉄橋を破壊されバ自衛上軍事行動に出ずるの他なし（中略）治外法権の撤廃を迫る以前に法典法廷の整備を計れ

一九三二年五月一六日【注、五・一五事件、犬養首相暗殺】

慨くべき事件であり加害者に対して大なる憤懣を禁ずるを得ない。殊に今回の加害者は新聞によると陸海軍の制服を着けたる士官とある。偏狭なる愛国心は二重に日本の国際的地位を傷つけた以外には何等の副産物も産出しては居らない。日本が激しいショーヴィニズムを有して居ると云ふ印象を外国人に与へ、

Hosei University Repository

同時に陸海軍自身のプレステイージを害したと云ふ事が之である。国家が重大な危機に面するや興奮して統制なき混乱振りを示すのであるならバ日本国民は果たして一等国民であるか。

一九三二年八月二六日【留学終了】

エデインバラには二年いた。最初の一年間は友達も出来なかったし、大してエンジョイアブルな生活でもなかったが昨夏頃から一年間はほんとに愉快に過ごした。

一九三二年九月一日【在英国大使館勤務を命ぜられる】

一九三二年一〇月四日【注、九月一五日満州国承認、一〇月二日　リットン報告公表】

リットン報告の語調決して日本に有利なりと云ふを得ない。ただ（中略）曖昧の標本であると云へない事もない。日本に有利な点としては満州国政府は支那大衆の意思によって設立されたるものでないが原状への復帰も亦不可であると云ふ点や支那の現状暴露、ボイコット非難の如き点である。何れにせよ日本は満州国承認によりその進むべき道をコミットして了った。聯盟の態度と出方一つで正面衝突をなすべき事は火をみるより明かである。何らかの点で両者の妥協があるとしてもそれは大分に苦しい妥協であると見なければなるまい。

一九三二年一一月一九日【聯盟総会に参加のため長岡駐英大使ほかとジュネーヴ出張、松岡代表も同じ頃ジュネーヴ着、宿舎のメトロポール・ホテルに一同参集、松岡全権は挨拶の中で】

日本上下の決心の如何に強固であるか、その覚悟の如何に悲壮であるかを説いて吾人が目的に向かって邁進すべきことを誇ると論じ満場を緊張せしめ中には感極まって思はず男泣きをする人もあった。国際連盟の歴史上最も困難なりとされ所謂『テストケース』視せらるる満州問題は愈々二一日の理事会にかけられることとなる。それは同時に又帝国外交史上の一の新紀元を画すべき重大会議であらねばならぬ。極東に砲煙を見て此処に一年有余、如何なる解決案が講ぜらるるとしても帝国の対満政策は重大なる影響を受けねばならない。松岡代表の決意も重なる哉である。戦雲が世界の一角にあったため日本代表は昨年寿府で不利の地位に立った。戦雲がとまれ収まった今日status quo anteあるいはその他の日本の欲せざる解決方法を講ずることは却って国際の平和を攪ることとなり聯盟の目的に反する事となるであらう。併し乍ら日本の fait accompli を認めることは同時に聯盟の面子に重大なる痛棒を与ふる事とも考へられる。雨か風か（中略）間際の静けさを包んで湖畔の美都ジュネーヴの夜は更ける。

【注、その後、連日理事会などで侃々諤々の討論が広げられたことを連日記述】

Hosei University Repository

一九三二年一二月八日

【注、松岡代表の「十字架演説」：「ヨーロッパやアメリカのある人々（注、世論）は、日本を十字架に架けんと欲しているのではないか。しかして、イエスが遂に世界に理解されたごとくに、我々もまた世界によって理解されるであろう。」この演説は総会の空気に一石を投じ、日本に同情的な空気を幾分生じさせた、と言われるが、そうでもなかったとの見方もある。】

松岡代表が約五〇分演説した。英語は殊に優れたりとは思はぬが演説振りは堂々たるものである。自己の云はんと欲する所をあれ丈に発表し得る人は恐らく現在の外交官中にはないであらう。午前中の波瀾もあり聯盟にとっても日本にとっても重大なる第一戦である。正面衝突となるか局面転換が可能であるか。此の一戦に於ける西端両代表の決議案【注、日本は条約違反、満州国は住民の意思によらないもの】は各国代表の演説より見て必ずしも多数国を以てキャリーされる可能性ありとは断言出来ない。松岡代表が熱弁を揮ったのも此の行き過ぎた決議案につき日本に有利なる空気を醸成せんがために外ならぬ。日本が聯盟の真摯な支持者であり聯盟加入国たらざる米露を控へて如何に困難なる立場にあるか、日本の満州に於ける努力と〇〇を論じ来たり堂々の論陣を張って満座を緊張せしめ、終わって拍手が起こったのも日本代表に対しては珍しい事である。

一九三二年一二月二〇日

今日までの間は帝国全権と聯盟側との決議案修正に関する応酬で終わった。吾は要するに決議案を骨抜きにせんとするに対し聯盟側は〇〇に関する問題は之を譲歩するを得ない、リットン報告は之は公正妥当と認むるの立場を取ったものである。結局二〇日を以て休会、満州問題は更に来年にその吟味を持ち越される事となった。

一九三三年二月二四日【注、聯盟総会、リットン報告書を採択、松岡退場】

松岡全権来たって会議の開かれたのは一一月半ば。三ヶ月余の折衝も遂に不調となり日本もとうとう聯盟を離れた。脱退については色々その得失を論議されよう。併し日本としてはコンシリエーションに失敗した以上こうなるより外に道はあるまい。ただその聯盟との協力は極東に於て終われることを宣言せるのみであるから必ずしも全然縁を切ったわけではない。日本としては満州国のコンソリデーションを早くやって除け聯盟をして文句を云はしめない事態を作り上げるのが最大の急務だ。日本は孤立に陥ちた。しかし、それは仕方がない。孤立の状態にあることを痛感するのは満州がゴタツイて居る時に於いて殊に甚だしい。満州が落ち着く時日本の現在の浮動的外交方針も自ずから固まってくるであらう。熱河討伐を速やかに片付けて満州国がその確実な足取りの第一歩を踏み出す日の早からんことを祈るものである。

Hosei University Repository

【注、一九三三年二月：万里の長城以北の満州に連なる熱河省で戦闘、長城以北は日本軍が支配、三五年の冀東防共自治委員会に関連；ドイツでは一九三三年三月、ナチが議会で絶対多数になり全権委任法成立】

一九三三年三月一一日【松岡代表英国訪問】

寿府での印象として松岡氏は気難し屋で大口たたきで戦闘的な人であるとの印象を得た（中略）然るに此の印象は多少変更あるいは付加せられざるを得なくなった。同氏は中々鋭い頭脳の持ち主である。見当も好い。時に非常に考へさせられる言句を吐く。それは而も政治的の方面に限られない。外務省の悪口も出る。但しその悪口の中にもただ悪口として聞き流し得ないものがある。趣味も中々豊富である。但し中々発展する。換言すれば大風呂敷を広げる。幣原外交を痛罵（中略）頭脳明晰ではあるが一方に風呂敷を広げるためか時に理論矛盾を来すことが少なくない。

一九三三年五月六日【南京総領事館に転勤を命ぜられる（注、一九三三年五月三一日塘沽協定締結、熱河作戦終了、外務省の関与しない軍事協定）】

一九三三年六月一二日【注、世界経済会議 The Monetary and Economic Conference

開催；六六カ国の代表が参加する未曾有の大会議、；二九年一〇月米国で株が大暴落、世界恐慌；三〇年米国スムートホーレー法高関税、経済ブロック化；三二年大統領選挙でルーズヴェルト当選、通貨安定化に反対したルーズヴェルト（国内経済優先）によりロンドン会議は不調、但し、三四年米国互恵通商協定で経済済ナショナリズム修正】

戦債問題の解決はその曙光を認めない【注、主に対米債務】。貨幣の安定性は破壊せられた。関税障壁は世界至る所に於いて高い。簡単に片付く訳がない。会議の成果について期待は持っていない。但それを有意義に終わらしむるの道がないと云ふのではない。

一九三三年六月二一日

目下の所問題になって居るのは米国全権団の歩調の件である。必ずしも統一されて居らない（中略）自由主義・国際協調主義の「ハル」もあればアイソレーショニスト「モーレー」教授も（中略）銀の産地ネヴァダの利益を代表して居るかの如き「ピットマン」も居る。本家本元のアメリカにおいて国際協調主義にしやうか国家本位で行かうかと目下の所思案投げ首だ。

一九三三年六月二六日

英米にゴールドオフされた佛、伊、蘭、日などの諸国にして

Hosei University Repository

みたらば貨幣の対外価値安定の問題は本会議において最緊要事として是非とも決定されなければならない。此の問題が解決されぬとしたならば本経済会議の意味はないとまで議論して居る。之に対して肝腎のアメリカはインフレーションによる国内物価の騰貴を策して居るのであるから真っ向から反対する【注、デフレ脱却優先】国際協調とナショナリズムの両刀を持って現れた米国全権は次第に国際協調を捨ててナショナリズムを押し出して来た。

【注、英国は三一年、米国は三三年四月に金本位制から離脱していた】

一九三三年九月一八日

【ロンドン離任、飛行機でアムステルダム経由ベルリン着、同泊。汽車でポーランド経由モスクワ着、同泊。二二日モスクワよりシベリア鉄道でノヴォシビリスク、クラスノヤルスク、チタ等経由して二八日満州里着】

一九三三年九月二八日

【満州里では】日本の勢力範囲に入った事を痛感【領事館を訪問して領事と懇談、領事警察官より質問】国境のロシア軍の動静如何、大軍でも集中して居りせぬか、と云ふこと（中略）チチハルでも同様質問（中略）驚くべき事である。勿論その心配は尊い。然し此れ等の人々のサスピションなり又此のサスピションなりを煽る人の存在しているべきは想像に難くない。ポーランドとロシアの国境では兵が◎面していたが（中略）却って満州里に於ける日露の如き双方相手の行動を知り得ざるよりも危険は少ないのではあるまいか。国境警察隊員なり軍人なりが常に此の気持ちでいる事は必要でもありまたやむを得ない事でもあるが、然し乍ら此のために彼らがプレマチュアの行動にでもでるような事があれば一大事である。

【蘇炳文反乱事件（注、一九三二年九月二七日に蘇が満州里で挙兵し在留邦人を拘束）の殉難記念碑が九月二七日に満州里で除幕されたが「特務機関長某大尉」の名が刻まれて居り在留民代表の意味で何故領事の名が刻まれていないのか不審に思い領事に質したところ】之は自分も合点の行かぬ所。記念碑建立については相談にあずかったが文言については何の相談もなく而も特務機関長一人の名前が出ているだけ（中略）不審なり不快に思う人もあったのか（中略）何者かが此の名前の所を抹殺せんとしたものがあった（中略）場所が満州であり又中央から遠ざかっている事でもあり軍人の勢力が愈々大で文官は口を出す余地がないのであらう。事小なりと謂えども現在の文官と武官の勢力の相違を露骨に表はしているものであらう。

一九三三年一〇月三日【四年ぶりで大連経由帰国】

日本人を見て気の付くのは公衆の面前に於ける礼儀において欠くる所ある点である。痰は吐く、ホテルの食堂へ紳士がスリ

Hosei University Repository

ッパで現れる、高声の談話をする、電信局で我勝ちに人を押飛ばす。必ずしも英国帰りを気取る訳ではないが矢張り此れ等は不体裁であり不愉快である。

【南京赴任前日本に二週間滞在し】日本の気分、亜細亜局の考え方なりについてかなりインフルエンスされた。日本の上下がかなりジンゴイステイックな考えでいることは殊に注意せられた。（中略）日露戦争なり日米戦争なりを平気で口言しているが日本は一体戦争してどうしようと云ふのだらうか。英国あたりをして手を打って喜ばしめ様と云ふのだらうか。（中略）日露については日本は速やかにその腹を確定する必要がある。（中略）一刻も早く不可侵条約なり国境審査委員会なり相互の意思了解を疎通せしむるための準備手段を講ずべきである。日露の戦争を否定する。日本の手が既に一杯であるが故に他ならない。

一九三三年一〇月二四日【船で上海着、二八日同発汽車で翌日南京着】

一九三三年一一月五日

【排日ビラなどを見聞すべく南京市内視察、多少発見】南京がこの程度になっていると云ふことにつき、総領事の努力は之を買はざるを得ずばなるまい。

一九三三年一一月一七日

【総領事主催夕食に中国側憲兵指令、参謀長、歩兵学校長、情報司科長などを招待】事変以来支那人は主として自分に対する評判の懸念から日本との接触は極力避け宴会に呼んでも来なかったものであるがボツボツ此の様に来出したのは好い傾向である。何れも此の人たちは達者な日本語を話す。或は日本に長く留学せる人もあれば縷々見学視察に赴いた人もある。

一九三三年一一月二四日

【福建独立運動で不穏な形勢】最初は中央も本運動の自然消滅を期待して高をくくっていたらしいが最近は少しく狼狽し出したようである。中央からの実力をもって本運動の鎮定にあたるかどうかという事は未だ疑問であるが強行態度を仄めかしていることは事実である。（中略）日本政府は本運動が反日の色彩を有せず又我が国及び国民の権益を害せざる限りにおいて不干渉主義（中略）事態の推移を注視する（中略）支那を少しも知らずして支那の中心に飛び込んで来た自分としては支那の実態は余りに複雑であり余りにも不可解である。（中略）支那は余りに広い。そしてその政治的支配の獲得は人の角逐に待つ事が余りにも強い。結果はその政治的関係を了知する事の極めて困難であるという観測に到達せざるを得ない。【注、一一月二二日～一月一三日「中華共和国」が存在していた。】

Hosei University Repository

【一九三三年一二月二二日から二七日まで上海出張、一九三一年一月の上海事変の戦跡がまだ生々しかった】

一九三三年一二月二四日

江湾競馬場の付近をドライブしたが何も残っては居らない。商務印書館の焼け残りも痛ましい。取り片付けてはあるが残骸が醜く青空にそそり立って当時の惨状を偲ばせている。

一九三四年一月一八日

福建問題もどうやら片がついた。一体中央軍が軍事的行動に訴えて本問題を処理するであろうか大なる疑問をもって見られていた所で、或は例の「ネゴシエーション」により有耶無耶に葬り去るのではあるまいかとの観察を下していたものもある。中央軍は延平方面に進軍し始めた（中略）何の雑作もなく延平を陥れてしまった。今更に呆気ない支那の戦争に驚かざるを得ない。「最後の一人となるまで福州を死守する」と豪語したのも支那式の形容と宣伝に過ぎず大した損害も受けない一九路軍が正々堂々と迅速に福州を撤退してしまったと言うのが事実らしい。今度の独立運動には例によって日本人のなかに一肌脱ごうという手合いもあったらしかったが外務省は終始一貫不干渉主義を表明

一九三四年二月五日【須磨新総領事着任】

同氏の荷物（中略）八〇何個の総計であると云うのも同氏が骨董と絵画のコレクターである事を思えば不思議はない

一九三四年四月一一日

華北の形勢に付いては日本軍の「侵略的態度」につき最近支那紙が一斉にデカデカと書き出し始めた（中略）上海では公使が〇〇に会ったその日、鈴木中将及び◎◎が相次いで面会している。誠に不思議なる現象であるが当地でも陸軍武官は本日、汪院長と会見を遂げた模様である。（中略）対支問題は福建に於いても広東に於いても完全に二重外交。（中略）誠にもって寒心に堪えざるのことと言わなければならない。

一九三四年四月二二日【注、一九三四年四月一三日天羽情報部長は「他国を利用して日本を排斥し、東亜の平和に反する如きことあらば日本は反対（中略）名目は財政的または技術的援助にあるにせよ政治的意味を帯ぶることは必然」云々と内外記者団に表明（「天羽宣言」）、東亜のモンロー主義と受け止められる；国民政府は「自国のみひとり国際平和維持の責任あるか旨を主張しうるものではない」と反駁】

恐らく日本スポークスマンは（中略）我が方関心をインプレスするため右の声明に出たるものであろうがその反響は或は予想以上に大きかったものではなかったろうか。然し乍ら我が方関心をインプレスする方法なり時機なりについては少しく見当

Hosei University Repository

を誤れる観なきに非ず。

一九三四年六月九日【南京総領事館の蔵本書記生失踪事件発生、拉致されたか、自殺をはかるか（中略）大問題に発展】

一九三四年六月一三日【蔵本書記生発見、副領事に昇進しないことへの不満が原因】

一九三四年一二月三一日【一年を回顧】

英米はゴタゴタはあったらしいがまずまず無事（中略）ヒットラー総督の就任（中略）ユーゴ国王暗殺をめぐる独仏伊（中略）などの軋轢（中略）欧州の平和がすぐ打ち壊される虞（中略）、ソ連の聯盟加入で一先ず食い止められた（中略）日支関係もまずまず此の分で進めるならば曲がりなりにも常道に復帰せしめ得るのではあるまいか。但これに対する反対の見方が先日上海で行われた陸軍武官会議の意見である。伝統的にして且つ未だ成功したる事なき本政策は好い加減に見切りを付けて統一ある且つ堂々たる外交を支那に行うことが少なくとも東亜の盟主を看板に出している日本の心組みではなかろうか。南京では日支無線連絡は完成され（中略）交通部債権は整理された（中略）日支事変後、此のくらい纏まった仕事の出来た事はあるまい。【注、陸軍は、国民政府の親日姿勢は経済不況を脱するまでの一時的偽装に過ぎないとの見方。】

一九三五年一月二四日

日本軍の察哈爾攻撃で一寸騒がしい。例によってこちらは何も知らず、ロイターあたりが日本軍は撤退中の支那軍に対し挑発なきに砲撃を加へたと大々的に書かれ（中略）当館へも色々聞きに来たが我が方に有利なる応対も出来ざる有様（中略）外交官の無能呼ばはりをする前に何故に彼らに（中略）材料を与へないのかと問い度い。外国新聞記者等を指導する機会もなにも忽ち逸して悪印象のみ宣伝されて了ふ。【注、察哈爾は満州の西隣、三五年六月察哈爾事件、三七年八月察哈爾作戦】

一九三五年一月二九日

鈴木武官は午後蔣介石と会見し公使は午後汪兆銘と会見した。公使は明日蔣介石と会談の予定。支那側は或は日本の不可侵を要求するかも知れぬし日本側は支那の無条件排日停止を主張するかも知れぬ。鈴木武官の会見後ステートメントが発せられた。蔣介石は未だ誠意なしと看取せられたと云ふ（中略）不思議である。一国の公使が来て居るのに武官は同時に独立に行動し公使に先んじて蔣介石とも会見し、公使が更に蔣と会見する以前に声明書まで発出して居るのだ。帝国国策の一致は喧伝されて居るが仮に一致して居るにせよ此の如き方法で何処に一致の看板を掲げ得べきや大いに疑いなきを得ない

Hosei University Repository

一九三五年五月一七日【注、英米に先駆けて在華公使館を大使館に格上げ】

支那側もその在東京公使館を昇格する旨外交部より発表（中略）同時に外交部はスポークスマン談話の形式をもって本件は慶賀すべきもので日支両国関係も互尊の精神により規律せられるべきものたるを述べる処があった。

一九三五年五月三一日【注、三日、天津日本租界で暗殺事件発生：二九日、天津駐屯軍の酒井参謀長が何応欽に対し国民党・中央軍の華北からの撤退などを高圧的に要求。】

北支の形勢が面白くない。孫匪討伐のため軍隊も遵化付近に動いて居る模様（中略）京津地方を停戦地域に包含せしめることを要求（中略）本件に関し北方から公電が入ったのは例により遅れて三一日朝だった。関東軍の今日の行動は公使館昇格問題でその存在を無視せられ外務省に一本とられたための腹イセであると外字紙通信員は報じて居る。公使館昇格が（中略）ラプロシュマンを希望する意思の表示であるとするならば北方に於ける軍事行動を右「日本」の意思と如何にリコンサイルさせようとするのであるか。日本外交の極端な二重性が此処にも暴露された。

【注、国民政府は天津で提起された件を外交ルートに載せて解決を図る事を申し入れたが広田外相は陸軍と協議の上、本件は主として停戦協定の問題なので出先軍憲と協議すべし、と外交ルートに載せることを拒否。結局、国民政府は日本軍の要求を受諾。】

一九三五年七月一日【注　大使館三等書記官兼副領事、中華民国在勤南京出張駐在を命ぜられる】

一九三五年八月一四日【注　汪兆銘が病気を理由に行政院長兼外交部長の辞意表明】

激烈なる汪攻撃が原因なりと観測せられて居るが北支事件、新生事件以来、汪兆銘の対日政策に対する不満（中略）【注、新生事件：上海の雑誌の日本の皇室に対する不敬事件。日本は謝罪・編集者の処罰などを要求、南京政府は最終的には承諾。】

一九三五年八月二一日

蔣介石が乗り込み来った（中略）蔣汪の会見は本日中（中略）夏の休暇の静けさから俄に南京は活気に充ち溢れた夏のターモイルに激変した。

一九三五年八月二三日

昨日、汪兆銘は留任に同意

一九三五年一一月一日【汪兆銘暗殺未遂】

暗殺者の黒幕に付ては勿論知り得べくもないが恐らくは汪院

Hosei University Repository

長の対日政策に対して不満をもった分子の行動ではないかと見られる。蔣介石が（発砲現場に）居らなかったと云ふことを以て同氏と暗殺を結びつけて考へるのは少し行き過ぎではあるまいか（中略）【注、犯人は中国共産党の刺客とも言われる】

一九三五年一一月五日【注、四日、国民政府は英国の援助のもと幣制の改革を実施；九日、この重大問題を日本に何ら協議する事なく実施した事に日本は遺憾の意を表明】幣制改革自体は支那のため、日本の対支貿易のため或は喜ぶべき事であるかも知れないが之が当然対英借款を誘致するものである以上又それが常に英支合作によって行われるものである以上東亜に於ける安定勢力を持て任ずる日本としては到底快からざるは勿論である。【注、「広田外相がもっとも警戒したのは中国と米、英との連携の強化であった。すなわち、米国、英国が単独、共同あるいは国際連盟の名によって中国に対し経済援助、技術援助を提供し日本を排除した国際協力のもとに中国の経済建設が進められることを憂慮したのである。」『外務省の百年』p269】

一九三五年一一月一四日

日支関係紛糾の兆しあり。支那側の排日行為再燃せりやの候著しく現はれて居るのと一二日南京路の日本商店を支那人暴徒一五、六名襲撃。六中全会五全大会に於いて日支衝突必至を唱へたる者ありとの報道があるのと、北支の形勢穏やかならざることにより、外交上の重大時期に当面し居るやに思はれる。

一九三五年一一月二〇日

有吉大使が（中略）蔣介石氏と会見した。会見は五時より八時すぎまで続いた模様（三時間）（中略）【注、日本側は広田三原則①反日言動の取り締まり、欧米依存からの脱却②満州国の独立を少なくとも事実上黙認③外蒙等からの赤化政策の排除を説明、中国側は華北の自治運動を抑制するよう要望】

一九三五年一二月七日【注、関東軍等には華北を国民政府から独立させようとの企図あり、幣制改革による中央集権化・国内統一への対抗；一一月二五日、殷汝耕の冀東防共自治委員会は国民政府より離脱独立を宣言】北支の形勢依然険悪なり（中略）帝国政府としては日支関係の大局より見て又国際関係の現勢より論じて、強力を以て北支を切り離すがごとき拙策を行うことなく実質上北支に於ける、延いては全支に於ける日支関係の調勢を図ること絶対に必要なりと考へて居るものであるが北支現地の日本側観測は必ずしも然らず、憂慮に耐へざるものがある。

一九三五年一二月九日

北支の政局もどうやら収拾されんとしている（中略）冀察政務委員会が設立され（中略）軍事・財政・外交・司法は依然南

Hosei University Repository

京政府に属すること等を条件に広汎なる自治が許されることとなったらしい。

一九三五年一二月一九日【注　大使が蔣介石と会談】

蔣介石の態度は相当不遜で大使を馬鹿にし切って居た模様である。北支問題紛糾し日本の軍事行動も懸念されて居た一月前には態度は強がりであっても内容は要するに北支情勢の緩和要請にあったものと思はれるが今回の会見では喉首の自由になった支那側は全く「上手」に出でたことは想像される処で、此の前の会見が熱議三時間に亘ったのに今回は一時間半位い（中略）大体会談の調子は想像できる。

一九三五年一二月二五日

上海の学生示威運動はかなり激烈らしく二、三回は北停車場を占拠し南京に請願に赴くと云ふので当局は機関車を上海より撤去し（中略）また蘇州、無錫のレール一部を取り外して之が南京来を妨げて居る。

一九三五年一二月二六日【注　前外交部次長唐有壬氏が上海で暗殺さる。】

日本側との連絡極めて密接なりしが故を以て時節暴徒（学生運動に関係がありはしないだろうか）の襲撃を受けたものと思はれる。汪兆銘射たれ唐有壬死し此処に汪一派は完全に駆逐せられ、その対日外交は清算せられたりと見るを得やう。

一九三六年一月一三日

政局の安定の見通しが付いてこそ初めて軍縮の成功　も予期し得るべき次第である。しかるに現今の東亜若しくは欧州の政局を見るに此の前提要件が全然欠如している（中略）会議の前の二、三年の空気こそ会議において各国政治家をして軍縮に決意せしめた重大要素なり（中略）不幸にして現在は全然状態を異にしている。さればこそ日本が真向より脱退ないし反対の旗幟を振りかざさずとも必ずやデッドロックに達することは明らかである。（中略）勇ましく孤軍奮闘を口にし脱退を辞せずと「大見得」を切っているが之は国内消費なら兎も角、外交としては誠に拙と謂わんよりも寧ろ無策なり（中略）責任は何処に帰属せしめんかと内心右顧左眄している列国は得たりとばかり此の馬鹿正直にして「奇特」なる日本に之を押し付けんとするは当然である。（中略）この際日本は十分その要求の正当なる所以の説明につとめるべきであると同時にそれこそ模々糊々（注、「ママフフ」曖昧な）の態度を持して（中略）結果の責任を一手に引き受けるが如きことなきよう外交の「老獪性」を示すべきである。

一九三六年二月二六日【二・二六事件】

午前外交部高宗武君より日本に不詳の大事が発生したらしい

Hosei University Repository

が真相如何との照会があったのを始めとして内外新聞記者等よりも頻りに問い合わせて来た（中略）午後本省より（中略）簡単な情報が入った（中略）七時外務省より詳細なる情報入電（中略）所謂少壮将校に沁み込んだ重臣ブロックの排撃による革命達成の序曲らしい。

一九三六年二月二八日

国家に最大の奉仕をなせる元老に対する危害行為をabhorrenceを以ては見て居らぬことが最も人の注意を惹いており又最も日本の世相を物語るものと考へられる（中略）岡田首相の遺骸は首相官邸が叛軍（支那新聞による）に占拠されたため漸く昨日に至り遺骸の引き取り交渉に成功したりと伝へられるがこれが国家の元勲に対する待遇かと思へば万感胸に迫らざるを得ない。（中略）「叛軍」が交渉によりて帰営せりとの報道は中略恰も支那の内乱に見るがごとくで、現在の支那人をさへ驚かしめて居り、新聞は（中略）「日本は常に他国の無秩序を云々するも今回の不祥事は殊に交渉による解決を主張する者ある実情に顧みれば他国のことを云へた義理に非ざるべし」と論じた。

一九三六年六月一日【外務本省東亜一課に配属（注、中国担当課）】

一九三六年一一月六日【出淵隆子と結婚】

一九三六年一一月二五日【日独防共協定署名（担当は外務省では欧亜局）】

一九三六年一二月一三日【注、一二月一二日、西安事件勃発、蔣介石監禁、国民政府が容共抗日に転ずるか懸念】

西安で蔣介石が一二日張学良のため監禁せられ（中略）支那時局の愈々重大なるを思わせている。旧東亜軍に対する赤化工作が遂に奏功せるものとも観測せられ（中略）この際対日関係は機微な点に到達するであろう。

一九三六年一二月二六日

今回の事件も要するに誠に支那式の結末を告げた（中略）蔣介石と云ふ者が支那の政界に如何なる大勢力を有するものであるか又一部の予想せる如く南京政権なるものが意外にその基礎固く（中略）到底地方政権と看做し得べきものに非ず、英米等の之に対する認識支持も亦公正確固たるものであることを示した。一般支那民衆の蔣介石に対する信頼並びに蔣を中心とする内乱防止、国内統一の気分も亦無視しがたい。「抗日」の機嫌取り看板を掲げた張学良も此の大勢に対しては或は目算外れの観なきに非ずと思はれる。【注、『外務省の百年』p274。一月二五日、華北分離工作の放棄、統一を強化しつつある国民師府の力量を認識】

Hosei University Repository

一九三七年一月二三日

議会開会早くも殺気を見せて居たが（中略）陸相に対する攻勢で忽ち軍部は臍を曲げ二日間の停会を命じ、一時議会解散説有力であったが遂に二三日内閣総辞職と決定を見た。立憲政治否定の第一歩として重大なる影響を及ぼすべきものである。

一九三七年七月一〇日【七月七日：盧溝橋事件、八日：早朝、広田外相のもと不拡大・局地解決を外務省として申し合わせ、その後の外務省東亜局長・陸軍軍務局長・海軍軍務局長の会議でこれを確認〜『同上』p277】日本軍と二十九軍（中略）が衝突（中略）支那側の態度強硬で一時は成行憂慮されたがどうやら撤退まで話合が付いた。これから善後措置に関する交渉が始まる。

一九三七年七月一一日

事件不拡大、現地解決で案外簡単に解決し相だったが話がもつれ始めた。今日は日曜であったが（中略）出勤する。課長も既に来て居た。【注、一一日の五相会議・閣議で不拡大主義と三個師団　増派を決定；一一日、国府側は日本が増派するなら自衛するとして増派停止を要請、同じ頃中央軍を北上させ始める。『同上』p278】

一九三七年七月一八日

話合が開始せられ幾何もなくして右は成立したのであったが何故か形勢は好転せず。天津軍参謀長をして「支那軍は我条件を容れたるにも拘らず尚兵を動かさんとするは皇軍の威信に反す」と云はしめ加藤書記官をして「現地解決にも拘らず尚事態を拡大せしめん方針なりや」と問わしめて居る。新聞をしてデカデカと（中略）「支那側の不信行為」「侮日排日の頻発」を書き立てしめ（中略）財界有力者は挙国一致の体裁を整へしめられ（中略）これで局面を収拾し得様がない。自分は十七日約一時間半程陸軍省軍務局へ連絡に赴きその空気を観察したが既に局地解決は絶望なりとの印象を得て引き揚げた。外務省の少なくとも事務当局は事件不拡大を旨として悪戦苦闘したが遂に刀折れ矢尽きた。十七日は南京に於ける城下の誓いに等しき要求諸条件の立案をさえ自分は命ぜられた。問題はどうして日支戦争を起こさねばならぬのか、日支戦争により得る処如何とか云った大義名分論や国家の得失ではないのである。「やらねば収まらぬ」のである。（中略）関東軍が関内に入った、内地から派兵に決した（中略）もうやらねば国民に申し訳がない、と云ふのである。或は日本の決意を示すことによって戦わずして南京側は我が方の要求を容れるであろうと観測している向きもあるがそれは要求次第である。支那の主権を害すると認めらるるが如き要求に対し蔣介石は勝てずと知りつつも戦わざるを得ないのである（注）。今日の「朝日」までが（中略）この際北支

Hosei University Repository

問題を解決して同方面の明瞭化を期すべしとの社説を出している。（中略）云うは容易であるが北支明瞭化は支那側の徹底武力圧迫により果たして達成し得るべきや。局面拡大と持久戦となりたる場合の対策如何。支那は徹底的に之を叩きのめし得ない国であることを知らねばならない。日本の経済的財政的準備は好いのか。一一日の閣議決定即ち事件の不拡大を実行し得なかった首相、閣僚の態度を難ぜざるを得ない。蓋し事件不拡大の鍵は事件発生の二、三日は支那側にあったが、その後は独り日本のみの手中にあったと自分は観測するものである。

【注、一九日、蔣介石は如何なる解決も中国の主権と領土の完整を侵害してはならない等の四原則を表明。『同上』p279】

【一九三七年一〇月九日から二〇日まで天津出張、帰国して肋膜炎と診断される。】【注、二〇日の閣議に三個師団派遣が提議されると聞き拡大反対の東亜局長・東亜第一課長は辞表を提出『同上』p279)】

【注、七月下旬、華北で全面的に衝突；八月一三日上海でも衝突；一七日の閣議で不拡大方針の放棄を決定し全面戦争突入；一一月一六日、国民政府は南京から重慶に遷都を宣言；一二月一三日、南京陥落】

【一九三七年一一月六日、日独伊防共協定署名】

一九三七年一二月一七日【一九三八年四月四日まで肋膜炎療養中】

南京入城式が行われたらしいが中山門の城壁が壊れている（中略）領事館の国旗台に再び国旗が掲揚された写真を見た（中略）南京を去って一年半しか経たぬ自分には一入感慨が深い。

一九三七年一二月三一日【一九三七年を振り返る】

何と云っても大きな出来事は支那事変である。七月中旬盧溝橋の衝突がこんな大事になろうとは当時何人が思ったろうか。自分等さえも事件発生の翌々日「もう終った」と云って机の上へ足を投げ出したものである。それが北支の戦線拡大、上海への出兵、上海に於ける膠着状態から本年末南京陥落へまで展開したのである。之と同時に日本の経済が戦時状態へ突入して行ったことはもちろんである。為替管理の強化は貿易統制に進み軍事費の増大は二五億の公債発行ということになった。日本の将来は財政的に経済的に多事多難であると云わなければならぬ。軍事的成功により楽観を許さぬのである。事変勃発の当初言をなす者は蔣介石は上海、南京を叩き付ければ参って来る、それが支那人の根性さ、と高をくくって連戦速決を主張していた。希望のごとく連戦とはなったが吾人の考えていたごとく果たして蔣介石は「参った」とは云わない。「速決」は希望の如くにはやってこないのである。吾人は長期戦に対抗する経済財政の

Hosei University Repository

体勢を整えなければならぬし軍事行動も必然的に長期戦を立前とし我が国経済財政の実力に準拠して進められなければならぬと確信する。

一九三八年四月八日【約半年療養して四月四日出勤】

支那問題の取り扱いはコペルニクス的な急展開を遂げた。其れは何処を叩いても、もう純粋な外交問題である部分を失った。紡績の問題も関税の問題も従来ならば外務省の或は東亜局或は通商局を中心として動いていたものであったが今や此れ等問題に「正当なる」発言権を有する者その如何に多くなったことか。内地各官庁が、支那問題に関連した外交案件に口を出そうとしている。

【一九三八年九月中頃、肋膜炎再発し体調不調（一二月から本格出勤）】

一九三八年九月三一日

本日宇垣外相の突如の辞職が発表された。問題は対支院に関するもので同院が外相の輔弼責任と抵触するがためと解せられる。（中略）時局収拾の主たる責任が外交当局に在りとの見解を堅持する同外相として今回の反対は素より当然と解せられ部外より入り来れる外相が、寧ろ妥協を遂げたる部内生え抜きの事務当局の措置に一驚せるなきやを疑う。【注、「対支院」とは、総理を総裁とし外務、大蔵、陸、海各大臣を副総裁として「支那において処理を要する政治、経済及文化に関する事務」等を所掌するもので、設置を一〇月一日の閣議で決定；「対支院」の設置は宇垣外相の対華和平政策を阻止するため陸軍が推進した、との説もある；「対支院」は一二月に「興亜院」と改称。】

一九三八年一二月一六日、【条約局第二課に発令】

一九三九年七月一五日～八月二五日【日英東京会談に参画】

【注、英国は表向きは中立ながら国府支援の方向；ある暗殺事件を契機として、天津の英仏租界は工作員の隠れ家になっていると見なされて日本軍が封鎖；この天津事件等を巡って東京で協議；援蒋政策変更の一般原則は合意出来たが具体論で合意できず決裂】

一九三九年七月二二日【有田クレーギー取り決め、同八月二五日：会談決裂】

一九三九年八月二二日【独ソ不可侵条約署名】

東京は唖然とした。蓋し五相会議は未だに日独伊軍事同盟でデッドロックに乗り上げ（注）、「盟邦」ドイツに「気を揉ませて」いた最中に此の発表である。一番面子を下げたのはモスコーでソ連のご託宣を待っていた英仏の軍事専門家と日本。蓋し

Hosei University Repository

情勢の変化に応じたる千変万化の措置に外交の妙手が秘められていることを忘れる者にとって一つの有益なるそして貴重なりしレッスンであらねばならない。【注、防共協定強化問題／対英仏等と独伊が戦争の場合の日本の参戦義務如何について東京では議論が紛糾していた。その中での独ソ条約締結であったので防共協定強化交渉は打ち切りとされた。】

一九三九年一〇月三日、「貿易省の権限に関する要項」を閣議決定：一〇月一一日、外務省高等官全員辞表提出：一〇月一三日の閣議で貿易省設置問題は総理に一任と決せられて終息

一九三九年一〇月一一日：貿易省問題は遂に大臣と事務当局との正面衝突から破局に到達してしまった（中略）全体会議は八時に開催（中略）会議は三〇分ぐらいで散開、一同黙々として引き揚げた。辞表は人事課長経由直ちに時間の手許に取り纏められた。

一九三九年一〇月一三日：

内閣側は外務事務当局の結束意外に固しと見て急に狼狽、折れ出して（中略）本日午後六時外相の省員に対する訓示の形で問題は解決した。

一九三九年一二月三一日【一年を回顧】

此の年は支那事変の第三年目にあたる。軍事行動一段落を告げた後の本年こそは実に汪兆銘工作を中心とした支那事変収拾の「夜明け前」の工作に終始した年でもある。中央政権は遂に本年中には設立せられなかったけれども、来るべき年も汪政権を中心とした工作は続けられて行くであろう。欧州政局も九月遂に破局を見、戦雲棚びいて陸上の戦闘こそなけれ海上封鎖戦、空中戦に於いてはかなりの戦闘が行われている。支那事変の処理にあたる日本として欧州政局の推移如何は重大なる関心事であらねばならない。